

ジュール・ラニョーの知覚論—身体と精神を統合する判断の能動性—

La théorie de perception de Jules Lagneau:

Le jugement au mode actif qui intègre l'esprit et le corps

(要約)

序

『名講義集』所収の「知覚についての講義」で展開されるジュール・ラニョー (Jules Lagneau, 1851-1894) の知覚論は、精神の能動的なはたらきを中心に据えて論じられる。そのため従来の研究では、ラニョーの知覚論を主知主義の系譜に分類し、その文脈で批判する傾向が主流であった。しかし本論では、ラニョーの知覚論は精神の能動性を自明の前提としつつも、身体を外的世界に場所を占め、外的世界からいわば反作用としての変容をこうむるものとして構想することで、単純な心身二元論の枠組みを超えてようとする試みであると主張する。

方法論としては、ラニョーが影響をうけたと思われる先行研究との対比をおこなう。フランスの伝統的な知覚理論の基礎を構築した哲学者たち、とりわけコンディヤック (1714-1780)、シャルル・ボネ (1720-1793)、メヌ・ド・ビラン (1766-1824) らのテキストを併読し、比較検討することで、ラニョーの晦渋なテキストを読み解き、その独自性の析出を試みた。18-19世紀フランス知覚主義に特有の、心理学と生理学とが渾然一体とした思想に着目しつつ、ラニョーが独自の規準に則って取捨選択し、批判的に継承した思想と方法論とを明らかにしていく。

本論文は全3章から構成される。第1章から第3章にかけて、「知覚についての講義」で表象的で高次の感覚とされる視覚・触覚・聴覚についての記述を順にとりあげ、それぞれの知覚的機能の特性を示した。視覚においては「予見 (prévoir)」、触覚においては「抵抗 (résistance)」「努力 (effort)」「筋肉的 (musculaire)」、聴覚においては「予期 (attente)」という語が鍵概念として機能する。いずれの感覚を語る場合にも、知覚の成立には精神の能動的参与が不可欠である。そのさい、身体がこうむる変容もまた考慮されていることに留意すべきであろう。

第1章 視覚についての記述

第1章では、視覚が「予見 (prévoir)」という精神のはたらきに支えられていることが示されるが、重要なのは予見が身体的な感覚に基づいている点であった。

第1節では、立方体の図の奥行きを知覚を例にあげ、視覚的知覚には感覚印象の予見が不可欠であると示した。感覚印象の予見は、われわれの身体にかかわると同時に、図における諸要素の関係の読み取りという抽象的な表象行為でもある。ラニョーの知覚理論は、この相矛盾するとみえる2項の共存のうち、身体と精神の相関性が含意されていることを主張するのである。

第2節では、生理学と心理学とが共存するかたちで視覚が論じられていることに着目し、この点は18-19世紀に特有の記述であり、ラニョーがビランから学んだ方法論を用いている箇所ではないかと指摘した。

第3節では、距離や凹凸・奥行きを知覚に際して色が担う役割をレリーフの影の色などを例にとり、影の色から知覚対象である延長のありかたを認識するためには、精神による判断が不可欠であると述べた。視覚におけるしるしを読み取るはたらきとは、精神の能動的判断に他ならない。

第4節と第5節では、しるしを読み取るはたらきに習慣の及ぼす影響を明らかにした。習慣が有する、知覚を完全化する一方で錯覚も引き起こす、という二面性についての議論は、ラニョーがビランから継承したと思われる。

第2章 触覚についての記述

第2章では、ビランの用いた語をラニョーがどのように理解し、独自の論を形成していったかを検討した。両者の思想の相違があらわれる箇所を示すことで、ラニョーの思想的特徴を明確化することを試みた。

第1節では、ビランを経由したラニョーの独自の表現である「筋肉的感觉印象」と「筋肉的行動の感情」を、ラニョーが「行動」と「変容」という語を用いながら区別した経緯と、この区別の仕方にビランとは異なる思想が看取されることを指摘した。ラニョーはまず筋肉的感觉印象と筋肉的行動の感情を区別し、次いでいかにして感覚印象は意識にのぼりうるのかを考察することをおして、知覚には知覚主体の能動的な関与が不可欠であると強調しながらも、身

体的側面をも語ろうと試みていたと考えられる。

第2節と第3節では、「抵抗」「運動」「努力」という語をラニョーがビランから継承した点に着目し、両者の思想の親近性と相違性がうかがえる箇所を指摘した。両者間の相違についてはアンリも『身体の哲学と現象学』で言及し、ラニョーはビランの思想を誤読していると指摘している。もっとも、両者間の相違はラニョーの単なる誤読から生じたものではなく、むしろこの相違のうちにこそラニョーがビランから離れて独自に思想を展開していった痕跡が認められると主張した。

第4節と第5節では、触覚的知覚に習慣が与える影響をアリストテレスの錯覚を例に挙げてラニョーが論じている箇所をとりあげながら、ビランとラニョーが習慣および錯覚をどのように捉えていたのかを比較した。ラニョーがビランのように受動的習慣と能動的習慣とを区別しなかったのは、ラニョーが知覚を能動的な判断に基づいて行われるものであると捉えていたからに他ならない。ラニョーの知覚論において、習慣や錯覚はつねに精神による能動的判断を傍証するものとして用いられていた。

第3章 聴覚についての記述

聴覚についての記述は、まず視覚・触覚についての記述が延長を対象とするのに対し、延長を有さないものを対象とする点で特異である。さらに、ラニョーが音ではなく一貫して音楽に着目している点も考慮すべきであろう。聴覚についての記述が「情動」や「快/不快」、「感動する」という情感にかかわる表現を伴うのも、音楽という作品を主題としているためである。

第1節では、ラニョーが多く参照していると思われるビランが聴覚を扱う箇所に焦点を当て、ビランが音楽の特殊な感受作用に着目していたことを確認した。ビランはまた、音声は聴くことと発声することの両者にかかわるがゆえに、音声に知覚を観念として再現前化させる機能を認めていたと考えられる。

第2節と第3節では、ラニョーが音楽の構成要素である音、律動、旋律の特徴およびそれらを知覚する音楽的聴覚の構造をどのように捉えていたかを示した。ラニョーは音楽的知覚とは相対的知覚であると措定し、継起する諸音を音楽として知覚するには持続の概念や想像力の概念、次に到来する音を予期するという精神の能動的はたらきが不可欠であると主張していた。

第4節では、2節と3節で示した音楽的知覚の特徴をふまえ、なぜラニョーが聴覚を、とりわけ音楽的知覚について言及したのかを期待や変容といった語彙を用いながら考察した。音楽的知覚は、外的な音によってこうむる変容と、次の音を期待するという内的なはたらきの相互関係のうちで成立する。ラニョーは聴覚の記述を音楽的知覚に絞ることで、変容をこうむり、情動が揺すぶられ、感動するという個別のかつ情緒的経験のうちにも、それが知覚に基づく経験である以上、根底には精神の能動的判断が存すると証明しようとしたのであろう。

結

以上の視覚・触覚・聴覚についての考察から、ふたつの結論が導かれる。第一に、ラニョーの知覚論は判断・予見・期待といった語彙を用いながら、一貫して知覚のうちに精神の能動的はたらきが存することを強調するものである。第二に、ラニョーの知覚論は精神の能動的はたらきを強調すると同時に、身体と精神の一種の協働関係を示唆するものでもあり、単純な心身二元論の図式に収斂しない理論展開が認められる。場所を占める身体を考慮しつつ精神の能動的行為を論じるラニョーの知覚論は、判断という語によって両者の共存を実現可能にする。テキストにみられる精神のはたらきと身体性の共存、哲学的な記述と生理学的な記述の共存は、知覚を異なるふたつの観点から論じることを模索するひとつの道筋への指標となるだろう。